

釧路湿原エコツアー「秋の塘路湖探検」の実施

地域住民を対象としたエコツアーを2007年10月6日(土)に実施しました。釧路市、釧路町、標茶町より19名が参加し、釧路湿原の塘路湖を訪れました。さらにエコツアーを学びに来日中のJICA研修員ら9名も加わり、抜けるような青空の下、カヌーに挑戦しました。湖畔ではヤマブドウやハマナスの実を見つけたり、森林から湖に流れ込んでいる湧水を量ってみたりと、秋の湖の自然を楽しみました。

カヌーで体を動かした後は、「ヒシ(菱)の実」を味わいました。夏の間に塘路湖の湖面に繁茂する水草・オニビシの実を地元漁業者が一粒ずつ収穫し、ゆでたものです。この実は地元で、保存食や薬として古くから親しまれてきました。初めて口にする参加者がほとんどでしたが、「栗みたいで甘くておいしい!」と、好評でした。

JICAの研修員にとっては、来日後これが初めての地域住民との交流となりましたが、力をあわせてカヌーをこぎ、ヒシの実をわけあって、皆とすっかり仲良くなりました。



「世界湿地の日」記念 冬のエコツアー2008の実施

ラムサール条約が採択された日を記念して定められた「世界湿地の日(2月2日)」関連イベントとして、地域住民を対象としたエコツアーを2008年2月2日(土)に実施しました。19名が参加し、釧路湿原に沿って走る冬季限定SL「冬の湿原号」で、車窓から釧路川の蛇行やエゾシカの群れなどを見学しながら、湿原の東側にあるシラルト湖へ向かいました。

氷結した湖面では、キタキツネやタンチョウ、エゾシカなどの足跡や食痕を探して、生き物達の行動を想像したり、雪や氷の美しさを楽しんだりしました。氷点下でも凍らない湧水の温かさや、氷が膨張してぶつかりあう時の大きな音に驚いたりしながら、北海道の厳しい冬の自然と、その中で生きる野生動物のたくましさを実感しました。湖畔では、つがい飛来したタンチョウを実際に観察することもできました。

湖畔に湧く温泉で冷えた体を温めた後で行われた「世界湿地の日」に関するレクチャーでは、今年のテーマ「健康な湿地、健康な人々」が、事例を交えて解説されました。



日本のラムサール条約登録湿地 シリーズ16 ～濤沸湖～

網走市と小清水町にまたがる「濤沸湖」は、北緯43度56分、東経144度24分に位置し、砂州の発達でつくられた細長い砂丘によってオホーツク海と遮断され、湖の北西端でわずかに海とつながる汽水湖であり、周囲27km、面積は900ha、平均水位は0.7mで、最深部でも2.5mと浅くなっています。

ガン・カモ類は毎年6万羽以上が飛来し、特に、オオヒシクイ、オオハクチョウ、ヒドリガモ、ミコアイサ、ウミアイサは、東アジア地域個体群の個体数の1%以上を支えており、絶滅危惧種のオジロワシ、オオワシ、タンチョウのほか、シマアオジも繁殖しています。

湖岸の低地には、塩性湿地帯が発達し、オオシバナ、エゾツルキンバイの群落、淡水湿地帯にはヨシ群落、ハンノキ林が分布しています。なかでも、ミズバショウ、アッケシソウ、ヒオウギアヤメの群落、また、濤沸湖の西岸からオホーツク海につづく砂丘上の8km、面積275haの湿原植生群落「原生花園」には、ハマナス、エゾスカシユリ、エゾキスゲなど、約40種の野生の花々が咲き乱れ、知床半島や斜里岳などを背景にした濤沸湖の美しい景観を眺めに多くの方が訪れます。

濤沸湖は、コアマモの藻場が形成され、スジエビやワカサギのほか、ヤマトシジミやカキ、アサリなどの魚貝類も生息していることから、内水面漁業の漁場として利用されています。

オホーツクの初冬は、湖口に土砂がたまり湖水の流れが停滞するため、春先には、周辺地域の人々が「潮切り(湖口を開くこと)」を行い、湖を保全してきました。湖畔の植生維持のために馬を放牧しており、開花前の春には、小清水原生花園前で毎年野焼きが行われています。

濤沸湖及び周辺域の環境保全とワイズユースを進めるため、関係者が検討や協議を行う『協議会』を設置しているほか、網走市と小清水町が共同で、「濤沸湖環境保全活用計画」の策定を進めています。



計 報

姉妹都市委員会委員長のジョン・パートレット氏が2008年1月に病気のため逝去されました。

1999年にポートステューブンス市長(後にニューサウスウェールズ州議会議員)として釧路を訪問されて以来たびたび当地へ足を運ばれ、姉妹湿地間の市民交流の牽引役として力を尽くされました。心よりご冥福をお祈りいたします。



KIWC newsletter

CONTENTS

JICA(国際協力機構)関連の事業	1
釧路湿原国立公園指定20周年記念事業	2-3
KIWC技術委員会の活動	3
観察会・エコツアーの実施	4
日本のラムサール条約登録湿地	4

釧路国際ウェットランドセンター(KIWC)は、自然に恵まれた北海道・釧路地方を拠点に、地域の充実した施設・豊かな人的資源を活用する地域ネットワークです。地元に根ざした湿地保全のための普及啓発と国際協力活動を、積極的にすすめています。



2007年度JICA湿地保全研修コースの実施

2007年5月21日(月)から7月3日(火)まで、JICA(国際協力機構)集団研修「湿地における生態系・生物多様性とその修復・再生及び賢明な利用」研修が、JICA帯広国際センターを研修実施機関、環境省自然環境局及びKIWCを受け入れ機関として実施されました。

集団研修として4回目の今年度は、5カ国(中国、ケニア、メキシコ、フィリピン、ウガンダ)より、環境保全や自然保護に係わる中堅行政官や専門家6名が参加しました。研修では北海道東部の湿地から、本州首都圏の干潟や里山、京都の庭池、沖縄のマングローブ林やサンゴ礁まで、日本各地のあらゆるタイプの湿地を訪れました。研修員はこれらの湿地で実施されている環境教育プログラムやエコツアーに参加し、その体験をもとに、自国における自然資源の持続的な利用のための具体的なプランを立案しました。

1ヶ月半におよぶ長い研修期間中には、地元ボランティアの協力により、研修員達が釧路の一般家庭をおとずれ、地域の人々と交流するひとときもありました。



2007年度JICAエコツアー研修コースの実施

2007年9月25日(火)から11月1日(木)まで、JICA集団研修「自然公園の管理・運営と利用(エコツアー)」研修が、JICA帯広国際センターを研修実施機関、KIWCを受入機関として実施されました。過去5年間の研修実施実績をもとに、今年度より新シリーズの集団研修として、5カ国(ガーナ、キリバス、ラオス、レソト、メキシコ)7名の、観光や環境保全の関係者を迎えました。

研修では、日本の自然公園の制度や利用の推進施策、エコツアーの理念などについて学ぶとともに、東北海道の各自然公園を訪れ、カヌーやハイキングなどのエコツアープログラムを体験しました。研修員はこれらの経験や、ツアーの実施者や視察訪問先施設の担当者との討論をとおして、地域振興と環境保全との両立が可能な、自国の自然・文化資源を活用する方法のひとつとしての「エコツーリズム」の導入・推進のための具体的なプランを企画し、研修の最後に発表しました。

研修員は滞在中、ホームビジットや地域住民とのエコツアー、学校訪問などの交流プログラムにも参加し、さまざまな世代の人々とのふれあいを楽しみました。



JICAモンゴル「住民参加型自然環境保全」研修コースの実施

2007年11月19日(月)から12月3日(月)にかけて、JICA帯広国際センターによる、モンゴルを対象とした「住民参加型自然環境保全」研修を受け入れました。モンゴルのラムサール登録湿地・ウギノールでJICAが進めている「集水域管理モデルプロジェクト」の一環として、国・地方自治体の職員と地元関係者の6名が参加しました。

研修は関東と北海道の2箇所で開催され、KIWCは北海道での研修を担当しました。漁業や馬産など地元の産業を活用したエコツアーに参加し、ツアー運営のための工夫や留意点について説明をうけたり、自然系施設の展示方法や、実施されている環境教育プログラム事例を学んだりしました。

今回の研修には、2001年にKIWCよりウギノールへ専門家を派遣した際、現地での調査に協力してくれた住民も参加しており、釧路での再会を喜び合うとともに、ウギノールに関する最新の情報を共有しました。



釧路湿原国立公園指定20周年記念事業

釧路湿原国立公園（1987年指定）の指定20周年を記念し、釧路地域では官民あけて、さまざまな記念イベントがおこなわれました。KIWCも記念事業として、釧路湿原を含む地域の湿地保全とワイズユースに関するワークショップ・講演会を開催しました。

「釧路湿原と阿寒湖のワイズユースを考えるワークショップ」の開催

2007年7月27日（金）に、特定非営利活動法人 日本国際湿地保全連合との共催で「釧路湿原と阿寒湖のワイズユースを考えるワークショップ」を、釧路市生涯学習センターにて開催しました。このワークショップは地域住民を対象に開かれ、釧路地域や阿寒湖で漁業や観光等に携わっている住民のほか、行政・自然施設の関係者や学生など、約40名が参加しました。漁業・観光関係者による湿地活用の事例紹介のあと、参加者全員が車座になり、湿地の環境に配慮した産業振興や、二つの湿地の共通点と違いなどについて討論を行いました。会場では、湿地の賢明な利用のためのガイドライン作りや、地域の独自性のアピールなどについて、さまざまな意見が出されました。



講演会／華道実演「湿地再生にいかす伝統芸術」の開催

2007年7月28日（土）、講演会「湿地再生にいかす伝統芸術」を釧路市生涯学習センターで開催しました。自然との調和を重んじる日本の伝統芸術を自然再生事業に活用する事例として、京都・大沢池の景観修復プロジェクトを、京都嵯峨芸術大学・真板昭夫教授にご紹介いただきました。

外来の魚「ソウギョ」の食害により大きな被害をうけた大沢池の生態系と景観を修復するため、真板教授を中心に、さまざまな分野の専門家や地域住民、学生などによるソウギョバスターズが結成され、環境、土木、造園などの多方面にわたる修復計画が進められていること、また、修復計画のゴールを嵯峨御流華道「景色いけ」で表現される「大沢池古来のすがた」に求めたことなどが紹介されました。

会場ではこの修復計画のキーパーソンのひとりでもある、嵯峨御流華道芸術学院・辻井ミカ副学院長による「景色いけ」の実演もおこなわれ、水盤の上に表現された、美しく、どこか懐かしい「水の風景」が、約40名の参加者を魅了しました。



豪州姉妹湿地公式訪問団への参加

釧路市が釧路湿原国立公園指定20周年記念事業として組織した、オーストラリア姉妹湿地公式訪問団（参加者合計32名）が、2007年11月2日（金）から11月8日（木）にかけて、ニューサウスウェールズ州にある姉妹湿地・ハンター河口湿地を訪れました。訪問団は釧路市議会議員や地域の商工関係者、国際交流に関心のある市民等で構成されました。KIWCからは構成団体の代表として標茶町教育委員会教育長が参加し、KIWC事務局の湿地専門家も訪問団のサポートとして同行しました。

ラムサール条約登録湿地でもあるハンター河口湿地では、長年この地で自然再生のプロジェクトを進めてきた「クーラガング湿地再生プロジェクト」のメンバーと一緒に記念の植樹をおこなったほか、地元のバードウォッチング団体や環境保護ボランティア、ウェットランドセンター関係者など、多くの人々と交流しました。



姉妹湿地訪問レポート

KIWC主幹 新庄久志（釧路市環境政策課湿地保全主幹）

このたび釧路市が主催する「豪州姉妹湿地訪問団」に参加し、ハンターウェットランズセンター、クーラガング湿地再生事業プロジェクト、ポートステイブンス姉妹都市委員会との姉妹湿地交流を行った。ニューカッスル市からポートステイブンス市に位置するハンター河口湿地と釧路湿原、厚岸湖・別寒辺牛湿原、霧多布湿原は、2004年に「姉妹湿地提携継続」の調印を交わしている。

ハンターウェットランズセンターでは、かつての湿地帯に造成されたラグビー場、酪農地の一部をもとの湿地に戻すため、市民ボランティアを中心とする湿地保全の取り組みが進められている。センター周辺のクーラガング湿地では、水位を調節する堰の設置、湿地林の再生、塩湿地・干潟の修復などを通じて、湿地の再生が試みられている。

訪問団は、地域の人々の様々な取り組みを視察し、かつて優占していたトネリコやレッドウッドなどの植林プログラムに参加した。ポートステイブンス市では、市民活動の拠点になっている「コミュニティ・アートギャラリー」において姉妹都市委員会のメンバーと交流を深め、人々のレクリエーションの場として親しまれている、ネルソン湾に面したトマリー・ワラー国立公園を視察し、生息するコアラやオポッサムなどを観察した。また、ポートステイブンス市からニューカッスル市にのびる約33キロメートルの砂丘地を中心に、州の東海岸域に点在する国立公園、自然保護区、州立公園をつなぐ「緑のコリドール（野生生物の住む緑の回廊）」として指定されたストックトンビーチ砂丘海洋公園を視察し、ジョン・パートレット姉妹都市委員会委員長をリーダーとする人々の多様な取り組みについて交流を深めた。2008年は、11月に豪州の市民訪問団が釧路を訪れる予定でいる。



KIWC技術委員会の活動

KIWCでは、湿地の保全と賢明な利用をより効果的に進めていくために、3ヵ年ごとに定めるテーマについて、専門家による技術委員会を組織し、調査・研究活動を行っています。2007-2009年度のテーマは「湿地生態系にかかわる外来種に関する研究」です。今日、湿地生態系に影響をあたえる人間活動のひとつとして「外来種」が注目されていることから、2007年度は釧路地域の湿地生態系にかかわる外来種の現状とその課題等について、事例研究を中心とした調査をおこないました。

2007-2009年度技術委員（50音順）
技術委員長 辻井達一（財北海道環境財団）
委員 河原 淳（霧多布湿原センター）
澁谷辰生（厚岸水鳥観察館）
高嶋八千代（北海道教育大学釧路校（非常勤））
針生 勤（釧路市立博物館）
蛭田真一（北海道教育大学釧路校）
若菜 勇（阿寒湖畔エコミュージアムセンターマリモ研究室）
若山公一（釧路湿原温根内ビジターセンター）

第1回現地検討会:ウチダザリガニの事例研究

2007年7月4日（水）、釧路市内にある春採湖畔にて、2007年度技術委員会現地検討会が行われました。今年度より3年間をかけて実施される「湿地生態系にかかわる外来種に関する研究」の最初の活動として、技術委員・オブザーバーなど関係者13名が、春採湖の外来生物調査の様子を視察しました。

委員のひとりである蛭田真一・北海道教育大学釧路校教授より、春採湖における北米原産のウチダザリガニの生息状況や、湖の環境に与える影響について説明を受けたあと、調査の現場を訪れ、捕獲されたウチダザリガニの回収や測定などのデータ収集の様子を視察しました。

参加者の間では、ウチダザリガニの駆除を進めるための、ボランティアによる駆除活動への参加の方法や、在来種ニホンザリガニとの関係などについて質問や意見がかわされました。



第2回現地検討会:オオハンゴンソウの事例研究

2007年9月1日（土）、厚岸町の子野日（ねのひ）公園にて、2007年度第2回目の技術委員会現地検討会が行われました。「湿地生態系にかかわる外来種」の一事例として、近年道内で急速に分布を広げている北米原産のキク科植物・オオハンゴンソウについて、繁茂状況の視察と駆除作業を行いました。

今回の駆除作業は、厚岸町内にある別寒辺牛湿原やあやめヶ原などの景観・生態系保全上重要な地域へのオオハンゴンソウ侵入の防止策として、今年度より厚岸町が実施する試験的なモニタリング調査の一環であり、町内外の住民ボランティアや関係者など、約70名が参加しました。KIWCからは、技術委員を含む9名が参加し、厚岸町担当者による町内のオオハンゴンソウ繁茂状況の説明を受けたあと、モニタリング対象の群落の抜き取り作業を行いました。

作業後の討議では、外来植物の分布の傾向、釧路地域の湿地における繁茂状況などについて情報交換が行われ、生態系保全上重要な地域への侵入阻止や、普及啓発の重要性などが話題にのぼりました。



「タンチョウ・オオハクチョウ紙飛行機キット」の作成

2004-2006年度の技術委員会活動「湿地の保全と賢明な利用のための広報・教育・普及啓発に関する調査研究」において、委員の澁谷辰生・厚岸水鳥観察館専門員考案の「タンチョウ・オオハクチョウ紙飛行機」を活用した普及啓発活動事例が報告されました。2004-2006年度調査研究報告書の別冊として、この紙飛行機の型紙に、タンチョウ・オオハクチョウに関する解説を加えたキットを2007年8月に発行し、関係機関等に配布しました。

現在、KIWC構成市町村や釧路地域の自然系施設で、タンチョウ・オオハクチョウの解説ツールとして、自然保護関連のイベント等で活用されています。



JICA研修参加者による外来種管理の取り組み報告～ザンビアより～

2006年度のJICA湿地研修に参加したザンビアのグリフィン・K・シャヌングさん（観光・環境・天然資源省）、から、帰国後の活動の報告が届きました。

グリフィンさんは現在、ラムサール条約に登録されているカフエ湿地に設置されたロチンヴァー国立公園における、外来植物ミモザ（*Mimosa pigra*）の駆除プロジェクトにコーディネーターとして取り組んでいます。繁殖力旺盛で棘だらけの藪を作る低木・ミモザは、公園内の生態系だけでなく、牧畜や観光業などの人間生活にとっても近年大きな脅威となっています。地域住民の手による駆除作業と、実験・モニタリング調査からなるプロジェクトの詳細なレポートは、地域が主体となった外来種管理の事例としてKIWCの技術委員会でも紹介され、委員の強い関心を集めました。

